

アワプラジオ通信【2014年12月号】

■発行元 アワプラジオ クリエイティブ ■102-0084 東京都千代田区二番町 5-2 麹町駅プラザ 901
■E-Mail: awapuradio@gmail.com ■TEL: 03-6868-5129 ■Web: <http://awapuradio.com/>

ヒバクシャの写真展を通じて平和の問題に取り組む

NPO 法人 世界ヒバクシャ展 事務局長 安在尚人さんに聞く



1956年、名古屋市生まれ。大学卒業後、新聞記者として環境問題に取り組む。退職後はさまざまな環境保護運動にかかわる。2011年から世界ヒバクシャ展の活動に参加する。

■公式サイト <http://www.no-more-hibakusha.net/>

—世界ヒバクシャ展とはどのような活動を行うNPO団体ですか。

森下一徹という写真家が伊藤孝司さん、桐生広人さん、豊崎博光さん、森住卓さん、本橋成一さんという5人の写真家に声をかけて写真展を始めたのが1999年のことでした。森下一徹さんは広島、長崎の被爆者の写真を50年前から撮り始めて、長く被爆者と付き合いながら力強くたくましく生きる姿を伝えたいと、写真集をつくったり写真展を開いたりしながら核廃絶のために貢献しようと活動してきました。

ただ広島と長崎だけが“ヒバクシャ”のいる場所ではない。核実験やウラン鉱山、原発事故、劣化ウラン弾などいろんな理由でヒバクシャが生まれ、世界中にいるのだということを伝えていかなければ核廃絶の道につながらないと考えて、そういう人たちの姿を伝える写真を撮ってきた写真家が写真を提供してくださって始まりました。

実際にオランダのハーグで写真展を行うなど2020年までに100カ国で開催したいという目標を掲

げて活動してきたのですが、一徹さんが病気になってしまったから6年ほど中断していました。しかし2011年に福島第一原発の事故が起きて、これらの写真をお蔵入りさせている場合ではないということになりました。ちょうどその時期、一徹さんの長女である森下美歩（世界ヒバクシャ展代表）からこれらの写真を見せてもらう機会があり、私もぜひこれを広める活動をしたいということで始めました。

私はそれまで環境保護運動にかかわっていましたが、写真展というのは初めての経験で正直なところ要領を得ないところがありましたね。

—来場者の反応はどのようなものですか。

みなさん涙を流しながら写真をじっくり見ていらっしやいますね。ヒバクシャの“悲惨”で“みじめ”な姿ではなく、たくましく生きてきた姿を紹介したい。原爆が落とされたその下にいたのは人間だぞということを一徹さんは伝えたかった。他の写真家の方もそういう写真を提供してくださったので、そこにはしっかりしたストーリーがあります。一枚ずつ立ち止まって全部の説明を読んでいくという人が圧倒的に多いですね。

見た人が自分も何かしたいって言ってくれます。「すばらしかった。あとはよろしく」ということではなくて、自分も何かしたいと思ってもらえるところはこの写真展のすごいところだと思っています。

広く関心を持ってもらおうという試みとして“世界遺産とコラボ”しようというものがあります。世界遺産と人類の“記憶遺産”としてのヒバクシャの写真。京都の金閣寺、銀閣寺に写真を持ち込んでコラボ写真というものを撮って、それをポスターにして写真展を京都のお寺で理解がある方の協力もあって開催が実現しました。これは一回で終わりということではなくて、国内・世界各地をまわってコラボ写真を撮りながらヒバクシャと聞いて数居が高いと感じる人にも見ってもらえるような仕組みとしていき

たいと思っています。

—日本の若い人はこういった分野に関心が低いように思いますがいかがですか。

台湾で2013年に開催された『零核時代』というイベントは、ヒバクシャ展の写真の他に福島に残された動物たちの写真や脱原発・反核のポスター展もあって世界中の映画が上映され、コスプレのショーやコンサートもあるといったものでした。大きな仕組みの中でみんなが楽しみながら取り組む。アーティスト系の方もいっぱい入ってきて伝え方もセンスがよく洗練されているなあと思いました。

これを開催したのは日本統治時代にタバコ工場だった場所で、今は台北の若者の人気スポットでもあります。フェイスブックで知った人と通らなかった人を合わせて2万人近くの参加があり、人が群がって写真の説明が読めないからボランティアの人がマイクで説明してまわるほどでした。日本では考えられないことで台湾の若者のパワーってすごいなと思いました。実は世界ヒバクシャ展でも若者のグループがつくられようとしています。やっぱり若い人たちの感性で若い人たちに伝えるということは、われわれが伝えることとは違う伝え方できるのではないかと期待しています。

ある大学の先生が言っていました。エコや環境保護に取り組んでいると言ったら「えらいね!」と言われるけれど人権問題と言ったらちょっと引かれる。

平和運動をやっていますと言ったら思いきり引かれてしまうという話をされていて(笑)。なるほどなあと思ったのですがそれでは困りますね。やっぱり平和ってあらゆることの基礎ですから。こんな危うい時代ですから余計に「平和運動は一部の人がやっているもの」というのではまずいですね。そんな意味からも若い人たちが興味を持っていく仕組みや仕掛けを考えていかなければいけないと思っています。

来年の戦後70周年という機会をどう活かしているかということはすごく重要だと考えています。広島・長崎では約7万人の朝鮮人被爆者がいたと言われ、その被爆2世もたくさんいます。そういう中で去年、韓国で写真展を開催することができたのですが、各地をまわりながらお詫びをしたいというのが森下美歩の一つの考え方でした。被害を受けたということだけを伝えるのではなくて第二次世界大戦、日本の統治時代から韓国やいろんなところで日本も迷惑千万なことをやってきたわけですから。お詫びの気持ちは持ちながら、でも真実はちゃんと伝えていくということ。そういうかたちでアジアの国ともつながっていったらと思いますね。

私たちが開催する写真展もあるのですが、基本は写真を貸し出して各地に関心を持っている人たちに写真展をやってもらうという活動ですので、ぜひいろんなところで開催していただけたらと思います。

※この記事の基となった番組音声はこちら

<http://bit.ly/1FfCmm0>

コラム「色即是空」／阿部美知子

山口の方言あれこれ

お年寄りA「Dさんが離婚しちゃったそ、あんたあ知っちゃるかね?」(Dさんが離婚したって、あなた知っていた?)

お年寄りB「知らんいいね。あねいに仲がえかったせえ、な一して別れちゃったそかね?」(知らないよ。あんなに仲が良かったのに何で別れたの?)

お年寄りC「あんたあ顔色がぶちわりいけど、どねえかあるそやないかね」(あなた顔色がすごく悪いけど、どこか調子が悪いんじゃないの?)

お年寄りA「そねえなことはないっちゃ。ゆんべおそうまで起きちよったけえやろう」(そんなことないよ。昨夜遅くまで起きていたせいだよ)

お年寄りB「そういやあ薬がみてたけえ、たいぎなけどこうてきちよかんにかあ」(そういえば薬が無くなったから面倒くさいけど買ってこなくちゃ)

お年寄りC「うちのいさまが買い物行くけえ、ついでに言うちよっちゃげようか」(うちの息子〈家族の中の男性〉

が買い物に行くからついでに頼んであげようか)

(以後もとりとめのない会話が続く……)

このように山口の方言をあれこれ書いてみると、県のゆるキャラ『ちよるる』の名前の由来でもある「ちよる」につながるものが多い気がします。私も半世紀以上、この言葉を使って育ってきました。目上の人と話すときには標準語で話せるのは、山口の言葉があまりアクセントの強いものではないからかもしれません。

山口のローカル番組で方言を紹介するコーナーがありました。そのとき解説を務める大学の先生が発声してみせる山口の方言は絶妙なもので、まさに山口のお年寄りが普段から使っているそれでした。

1948年、愛知県でフランス人の父と日本人の母との間に生まれる。亡き夫から引き継いだ飲食店をたたんだ後の97年頃からうつ病を患い、現在は障害者手帳を持つ。東野圭吾や横山秀夫などのミステリー小説を読むのが趣味。阪神タイガースのファン。山口県内の福祉施設で生活している。

インターネットラジオ アワプラジオ

■東京ラブレター（毎週木曜日・21:00~21:30）
首都圏で活動するNPOやNGO、市民グループや個人の方を紹介する番組です。

●12月のオンエア【4日、11日、18日、25日】
「長田区出身。神保町で『街づくり』と『映画づくり』の融合をテーマに取り組む」
神保町映画祭 実行委員長 里みゆきさんに聞く
ナビゲーター:あべこう一、高木祥衣(OurPlanet-TV)

●番組の聴き方
「サイマルラジオ」(<http://www.simulradio.jp/>)にアクセス→「近畿」から「FMわいわい」を選択
スマホやipadからはアプリ「TuneIn Radio」をダウンロード。「FMYY」を選択してお聴きください。

●東京ラブレターのページ（過去の放送が聴けます）
<http://awapuradio.com/awapuradio/tokyoletter/>

番組アップロード情報

●『すぎさく×あべこう一 音楽やCDについて語る』
音声はこちら <http://youtu.be/mdIoRdqfJAg>

あべこう一の音楽活動

■2014.12.19（金）あべこう一 Presents「ダダの会」

Open_18:30 / Start_19:00

場所:東京・下北沢ロフト

(小田急線・京王井の頭線「下北沢駅」南口5分)

出演:すぎさく ラビッチゅ Mico Urara

あべこう一 and more?!

●イベントのサイトはこちら

<http://awapuradio.com/2014/11/09/141219dadanokai/>

セミナー・イベント情報

■2014.12.22（月）あべこう一コーチングセミナー
「30代のための“眠らせている資源”を発見するコーチング」

多くの人は普段から自分が当たり前に行っていることが、実は他人にとってはすごいことだということに気付いていません。あなたの中に眠るすばらしい資源を発見して目標や夢を実現しよう！

日時:2014年12月22日（月）19:30~21:00

会場:ちよだボランティアセンター3階C会議室

(JR「水道橋駅」東口5分・地下鉄「神保町駅」A5出口5分)

講師:あべこう一（コーチ）

資料代:1000円

※要事前申し込み。10名程度のお部屋ですので先着順とさせていただきます。

問い合わせ&申し込み

awapuradio@gmail.com/03-6868-5129（阿部）

※件名に「コーチングセミナー参加」と入れて本文にお名前、電話番号、メールアドレスをご記入ください。

●詳細はこちら <http://awapuradio.com/seminar/>

■「アワプラジオのメールマガジン」を発行しています。
購読は無料。ぜひ登録をよろしくお願いします。

●登録はこちらから

(「アワプラジオのメールマガジン」で検索)

<http://www.mag2.com/m/0001627648.html>

Abe's VIEW Vol.1 お星さまになるまでに



私も平均寿命の約半分を生きてきたせいか、特にここ2、3年で相次いで縁のあった人を亡くしました。ごく一般的な感覚からするとみんな早世の部類に入る年代の人ばかり。あれこれ患っている姿などの“死の影”よりも、むしろつい最近まで冗談を言って笑い合ったりした記憶のほうが生々しく、その悲しみにはある種の困惑も伴います。

そんなことが続くと戻らない過去や不確定な未来にとられるよりも、今日のこの一瞬を大事に生きるということをおぼろげにはいられます。誰かが言っていた人生訓としてではなく、心の底からそう考えるようになりました。「大事に生きる」の内容は人それぞれでいい。日々を気持ちよく過ごせたらと思います。

10年前の自分に「10年後の自分はどうなっていたい？」と問いかけたら何で答えたんだろうかと考えます。ちなみに10年前の私は故郷の山口県で書店に勤めながら作曲やバンドをやっていました。漠然と「何者かになりたい」とは思っていましたが、一日一日を大事に生きていたかと問われればたぶんうっむしかありません。

「宇宙に存在するものは決して消滅することはない、ただかたちを変えるだけだ」という話が好きです。小さな子どもに対して亡くなった人のことを「お星さまになった」と言いますが、このことを知ってからはあながち子どもだましかとは言えない気がしています。人間が死ぬ確率は100%。いろいろ焦らなくてもいいかなと思える社会をつくるのが私のすべての行動の先にある目的ではないかなと、おぼろげながら考えています。

あべこう一 1976年1月、山口県生まれ。15歳の頃から作詞・作曲活動を始め、バンドのヴォーカリストやギター弾き語りスタイルでのライブ活動を行う。書店員として10年間、NGO団体のスタッフとして8年間勤務。脱原発や反基地などの市民運動にかかわった。ラジオパーソナリティとしてはこれまで多くのNPO・NGO関係者などのインタビューを行う。2014年、こうした経験や対人スキルを活かしコーチングのコーチとして独立。

本の紹介

忘れじの宿 (2009年9月) ※「月下の恋人」に収録

浅田次郎 著・光文社文庫・552円(税別)



街中に“宴”といった文字が多くなり、忘年会シーズンを意識する時期になった。心なしか街中も慌ただしくなってきたように思う。忘年会とは読んで字の如く、今年1年の良くない出来事を飲んで騒いで忘れましょうということなのだが、この「忘れじの宿」に登場する宿・忘庵(ぼうあん)は、同じ忘とあっても忘年会のそれとは

少々趣が異なる。

主人公・杉田は13年前に妻と死別し、以来独り身を買っている。だが周囲は思いやりなのかお節介りなのか分からない世話を焼き、彼の仕事仲間である女性・薫となんとかくっつけようとする。杉田も薫を受け容れようと試みるのだが、心から愛した妻を意識してしまいどうしても先に進めないでいた。

心の整理をするべく彼がふらりと訪れた宿「忘庵」。そこには一人の按摩師がいる。彼女は他者には知り得ない「忘(ぼう)」というツボを知っている名師だった。彼女は言う。愛や情けや恨みやつらみはそのツボの下で痾(しこり)となり、記憶の中に留まってしまうのだと。

恨みやつらみなどはないはずの妻との思い出。だが、だからこそ杉田の中に巣食う痾となり、痛みを持ってそこに存在していた。死にゆく床で妻が懸命に杉田に伝えた「わすれてよ」の言葉。未来と過去の狭間に揺れる杉田の耳に妻の言葉が優しく蘇る。

忘れられないことというのは忘れたくないということと同じこと。彼女はそう静かに語りながら杉田に尋ねる。「この痾をほぐせば、愛した人の顔も姿も愛した気持ちも

すっかり忘れられます。ほぐしますか、それとも持っておきますか」。蛍が舞う山深い庵の一人で杉田は、妻の自分への想いと対峙する。しんと空気が鎮まる冬の夜、忘れられない思い出と向き合ってみるのも良いかもしれない、そんなふうにする一編である。(浅香友里)

メールのなかの见えないあなた (2001年6月)

キャサリン・ターボックス 著／鴻巣友季子 訳
文春文庫(絶版)



思春期に吹き出す異性、恋愛への興味や、性的好奇心、訳知りの優越感。家族からの自立意識が芽生える一方、いまだ未熟で無防備な年代。それが中学高校生時代、ティーンエイジではないだろうか。

一人の少女がインターネット上で出会った男性とチャットで会話を重ねていくうちに、実際に会うことになって起きた一連の実体験

が、作家となった彼女自身によって描かれる。

少女趣味を持った男性との接触から、その後は学校での執拗な嘲りが続く。飛び交う憶測や噂はさもすれば実際に受けた被害よりも大きい。やがて彼女は転校し、段階を経て乗り越えるに至る。

性体験を持つことで成熟の証として優越感を持つとする生徒や、生徒の性事情に探りを入れようとするカウンセラーなど学校における、性のあり方が冷静な目で書きだされる。世間体を気にする母親や再婚相手の父親との素直になりにくい関係にも触れられ、取り巻く家族の問題も言及される。この本の舞台はアメリカだが、日本においても中高生に等身大で身近にある問題として迫るものがある。

(内藤千尋)

「アワラジオ通信」を毎月あなたの家のポストへ！ ファンクラブ“Oasis”会員募集

■サポーター会員になる(お申し込みの上、下記の口座へ年会費をご入金ください)。

【入会金0円 年会費4200円】

■郵便振替・銀行振込で寄付する(みなさまの温かいご支援を下記の口座までよろしく願いたします)。

【郵便振替】

郵便振替口座 15530-3969671

名義 阿部浩一

【銀行振込】

中央労働金庫 本店営業部

普通 3113628

名義 アワラジオ 事務局長 阿部浩一

三菱東京UFJ銀行 インターネット支店

普通 3772395

名義 阿部浩一



申し込み・お問い合わせ awapuradio@gmail.com 03-6868-5129 (担当:阿部)

編集後記

前号と今号からアワラジオ通信の執筆陣に新しい仲間が加わりました。紙幅の都合上、限りがあるとはいえさまざまな視点が加味されることで、より内容が豊かになることを期待してのことです。いろんな方の協力があってこそその活動だとありがたく思っています。あべこうファン

クラブ“Oasis”(年会費は4200円)にご入会いただきますと、毎月アワラジオ通信を発送いたします。インターネットの時代だからこそ紙の手触りにもこだわりたい。今後もより一層、紙面の充実にも努めてまいります。応援よろしく願いたします。(阿部浩一)